

■基調講演：「障がい者の就労支援：企業の発想・論理をキャリア支援に活かそう」

秦 政氏（NPO 法人 障がい者就業・雇用支援センター理事長）

「就労」（はたらく）は、障がいの有無を問わず、市民の社会参加という観点からは極めて重要なテーマのひとつであることは論を俟ちません。

近年、障がい者の就労とその支援については、制度、企業の関わり、そして学校におけるキャリア教育など、様々な角度から活発に議論されつつあります。そこでは当然ながら「障がい」という状況に対する配慮や支援の工夫などが検討されることとなりますが、ともすると、従来の専門職制としての教育（教員、研究者）あるいは社会福祉（行政者、福祉職員）の文脈の枠組みから抜けきれないこともあります。

「マッチング」という課題がこの領域ではよく取りざたされますが、それは当事者の能力としての問題のみでなく、援助者が思い描く就労場面での状況と現実とのギャップである場合も少なくないように思います。

秦氏は、リクルート社の一線で活躍された後、特例子会社「リクルートプラシス」を設立、そして日本経団連障害者雇用アドバイザー等を歴任されるなど、まさしく企業のキャリアをお持ちです。副題として「企業の発想・論理をキャリア支援に活かそう」と御願したのは、良い意味での「企業の論理」をこの領域に導入することで、就労だけでなく、教育や福祉といった領域にも、新しい対人援助（ヒューマンサービス）の方法について示唆をいただけるかも知れない、という思いも込めております。

（文責：望月 昭）

御著書

『障がい者雇用促進のための 119 番』（執筆・監修）

『精神障害者雇用のための Q&A』（執筆・監修）

『ケースで学ぶ障がい者雇用促進支援講座』（監修・執筆）

『特例子会社設立による障害者雇用推進の功罪』

改定『職業リハビリテーション入門』（部分執筆）

厚生労働大臣指定講習テキスト『障害者の雇用管理』（執筆）

『会社で使う手話』（監修）

『特例子会社設立マニュアル』（執筆・監修）

学会主催シンポジウム：「障がいのある個人の継続的支援のための地域連携」

企画・司会：望月 昭 氏（立命館大学）・朝野 浩 氏（立命館大学）

話題提供：

☆「学校からみた福祉や企業の連携と情報共有」朝野 浩 氏（立命館大学）

☆「京都におけるこれからのキャリア支援」生田 一朗 氏（京都ほっとはあとセンター）

☆「地域連携・移行にむけた課題」光真坊 浩 氏

（厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部 障害福祉課）

指定討論者：秦 政 氏（NPO 法人 障がい者就業・雇用支援センター理事長）

障がいのある個人の「継続的支援のための連携」というテーマは、本来、対人援助という領域の中の特定の作業やプロセスに特化した問題ではない。対人援助とは、そもそも社会的関係の中で繰り返される（継続される）営みに対して、当事者の「自己決定」を基本とした「より良い状況」（well-being）の展開に向けて、人的・物理的・社会的環境設定の再検討や変更の要請（＝援護）も伴う当事者との協働作業である。「対人援助」とは、特定の援助者が黙々と直接的支援を行うにとどまらず、絶えずこれを可視化し、社会に（そして自身にも）明示していく社会的行為である。そしてその明示（言語化）のフォーマットの最適化を迫及することが「学」としての「対人援助学」の大きな役割のひとつといえよう。

「地域連携」といえば、就学や就労などの「移行場面」における支援の継続性などがまずは想起されるが、上記したように絶えざる「より良い状況」への展開においては、「連携」とは教育・福祉・就労に関わらず、当事者が現在属する各地域セクターの内部でも絶えず必要な作業である。今回は、3名の方にそれぞれの立場から、そうした広い意味での「連携」のありかたについて話題提供を行っていただく。

朝野氏は、長きにわたり京都市において特別支援学校の校長を務められ、学校という地域セクターを軸に、「ジョブコーチ」という役割を学校教育（教員）の作業に初めて取り入れ、またまさしく「連携」のツールとしての「個別の包括支援プラン」というユニークな個別の教育・支援を作成されてきました。また昨年度より実施された厚労省の指定課題 25「障害児支援の強化に向けた福祉と特別支援教育における連携に関する調査」の中心的メンバーとして活動を行われています。キャリアの中の学校を軸に連携のありかたについてお話を伺います。

生田氏は、長らく京都府社協で活動された後、現在「京都ほっとはあとセンター」において、従来の福祉的パラダイムの大筋からみれば不足してきたようなサービスのオルタナティブの設定の可能性の追求、あるいは文字通りの関係セクターとのコーディネータとして活躍されています。そのような立場からの連携や情報共有の課題などについてお話を伺います。

光真坊氏は、前記、指定課題 25 において厚労省の担当となっていたいただいた方です。この指定課題 25 の特徴は、従来、ともすれば省庁間で「縦割り」であった障がいのある子どもの支援について、学校、福祉の枠を超えて、まさに「継続的キャリア支援」とでも言うべき方法の探索を志向する点で大変重要な転換であるように思われます。そのような課題について、現在、厚労省ではどのような方針あるいはプランを持っているのかなどについてお聞きしたいと思います。

指定討論としては、基調講演でもお話を伺う、秦 政氏から包括的なコメントなどをお聞きします。

（文責：望月昭）

■ランチミーティング：『パレスチナ・イエメンでの心理ケア』

河野 暁子 氏（臨床心理士）**※当日の撮影・録音は固く禁じます。**

臨床心理士として、2006年より国境なき医師団の活動に参加し、これまでパレスチナへ2回、イエメンへ2回、東日本大震災と合計5回派遣されました。紛争被害者、性暴力サバイバー、自然災害被災者へ心理ケアを提供してきています。現在は千葉大学こころのケアチームのメンバーとして、東北で活動しています。

【内容】国境なき医師団メンバーとして、パレスチナとイエメンで行なってきた紛争被害者への心理ケアについて話します。パレスチナでは、家庭訪問を中心とした個人心理療法を提供しました。イエメンでは、長期に紛争が続くソマリアからの難民を支援しました。限られた活動の中では困難なこともたくさんありましたが、臨床心理士としてのやりがいも十分に感じてきました。

■企画ワークショップ1：『対人援助学』マガジンの可能性

団 士郎 氏（立命館大学）

本来はニュースレターの位置づけであるモノを拡大してスタートさせたのが「対人援助学マガジン」です。現在、第6号まで学会HPで刊行（季刊発行）されており、会員、非会員を問わず、WEB上でご覧になることが出来ます。連載専門誌として広く対人援助領域から、現在27本の連載記事があり、更に次号から新連載二本が加わる予定の、学会活動の一つとして、かなり活発なものになっています。

年一度の大会において、この執筆陣同士が、あるいは読者と執筆者が、近しく交流できるのは良いことだろうと考えて始めたのがこのワークショップです。近接領域との交流や地域ネットワークなど、様々な連携を目指す学会にとって、自身の専門領域からのコンテンツを発信し続ける執筆者会員と、直接意見交換できる良い機会です。ゲストスピーカーを定めたり、テーマを決めたりせず、マガジンに書かれているコンテンツがどれでも話題になる自在性をもって進行したいと考えています。その進行を編集長（団士郎）と副編集長（千葉晃央）がおこないます。

■企画ワークショップ：「IPE教育（専門職連携教育）について」

臼井 正樹 氏（神奈川県立保健大学）

柏 絵理子 氏（神奈川県立保健大学）

神奈川県立保健福祉大学では、“ヒューマンサービス”をキーワードとして保健医療福祉分野の人材育成を行ってきている。そしてヒューマンサービスという言葉を具現化するための象徴科目として、1年次前期配当の「ヒューマンサービス論Ⅰ」、4年次後期配当の「ヒューマンサービス論Ⅱ」があり、大学院においても「ヒューマンサービス特論」、「ヒューマンサービス演習」を配置している。

このうち、学部4年次後期配当の「ヒューマンサービス論Ⅱ」では、看護学科、栄養学科、社会福祉学科、リハビリテーション学科の各学生が混在する10～12名程度のグループを編成し、臨床事例を使ってグループワークを行う授業としている。この授業の最後に行ってきた3年分のアンケート結果を紹介しながら、日本で最も早くから組んできたと思われる神奈川県立保健福祉大学における専門職連携教育についてご紹介することとしたい。

時間があれば、あわせて大学院における取組の様子や、看護師と社会福祉士の国家資格を同時に取得できる教育の状況についても言及したい。

■企画ワークショップ：プレイバックシアター「援助すること・されること」

各務 勝博 氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科/京都福祉サービス協会）

心理即興劇であるプレイバックシアターの手法を用いて、対人援助職として、また援助される側として、日々の思いや感じていること、また喜び・悩み・葛藤等、様々な思いや感情を交流し、共有したいと思います。

具体的な進行としては、様々なゲームを通じて感情や気持ちの共有化を行い、グループ作りをしていきます。そして、プレイバックシアターには、参加者全員に、それぞれ、語り手として、観客として、また劇の演技者として参加して頂きます。

プレイバックシアターの中で、実際に起こった出来事、そしてその時の思いや感情を共有し、「援助すること」とは、また「援助されること」とは、そして「援助者間の葛藤」などについて、参加者同士で考えていく場にしていきたいと考えています。

■企画ワークショップ：「援助者が複線径路で支援を考えるとすること」

サトウタツヤ 氏（立命館大学）、安田 裕子 氏（立命館大学衣笠総合研究機構）

話題提供者：長谷川恭子 氏（大阪大学大学院連合小児発達学研究科）

和田 美香 氏（厚木市立病院小児科心理外来）

鈴木美枝子 氏（静岡県立静岡北特別支援学校）

支援をするにあたり、対象となる当事者の経験をどう捉えればいいのか。当人の行動や語りが根本的に変容するとはどういうことか。援助者が、当人の日常の活動のなかに埋め込まれているかもしれない行動や認識が変容する分岐点とその径路を複線的に捉える眼をもつことが、支援的な関わりにおいては重要であるだろう。本ワークショップでは、TEM（複線径路・等至性モデル）という分析・思考の方法論的枠組みをツールとして用い、3名の援助実践から支援について考えたい。長谷川氏は、発達障害が疑われても早期療育につながらないケースが多いことをカウンセリングで痛感し、そうしたケースに有効な介入を検討する。和田氏は、ひきこもりを抱える家族におけるきょうだいが、家族から自律するまでの体験の径路をインタビューから明らかにし、有効な心理的援助について検討する。鈴木氏は、特別支援学校の教師の実体験と観察に基づき、自閉症児とのかかわりのエピソードを分析し、自閉症児を理解する視点の生成過程について検討する。

■企画ワークショップ3：人はなぜ苦しいのか。そして、どのように新しい1歩を踏み出すのか。

「— 苦しみを構造的に理解する方法と聴くことの本当の意味 —」 症例検討：がん患者

基調発言：佐藤 泰子 氏（京都大学大学院医学研究科）

司 会：市木 一則 氏（NPO ケイアフェクション代表 グリーフケア実践家）

ワークショップの流れ：1. 基調発言 2. 症例検討

人はなぜ苦しむのか、そして、そこから解放されていく手立てとはなにか、苦しんでいる人を支えるにはどのように寄り添ったらいいのか、これらの問いに答えるために、苦しみからの解放のプロセスを提示し、様々な状況下での援助者の立ち位置を判断できるモデルを示すことが本ワークショップのねらいである。

誰でも、これまでの人生のなかで苦しみに出会う度に自ら小器用な手立てを講じて生き抜いてきた。人がもっている艱難辛苦を乗り越える力の構造を詳解する。それにはまず、「人はなぜ苦しいのか」を端的に表す枠組みが必要となる。そこであらゆる苦しみを構造的に理解できるモデルを構築した。「苦しみと緩和の構造」モデルは、「苦しみ」からの解放のストラテジー（方策）の根拠を説明可能にする。「人はどのようにして、その苦しみを超克するストラテジー（方策）を見出すのか」という問いに答えなければケアの方法論を構築できない。そのモデルは、単純な図式であるが「人はなぜ苦しいのか」に答えるだけでなく、そこから自らを解放する手立てがわかる仕組みになっている。さらにこの図式は、苦しんでいる人をどのように支えればいいのか、あるいは援助者の立ち位置を示してくれる。援助職者が患者・利用者の苦しみを構造的に理解しアセスメントできる里程碑として「苦しみと緩和の構造」モデルを提案する。

ケアの本質を思索するために、この「苦しみと緩和の構造」モデルを構築したのであるが、さらに、このモデルを構築したもうひとつの理由がある。援助職の方々のために、話を聴くことの大切さは、さまざまな書籍で示されている。しかし、「なぜ、聴くのか」についての深い言及も要理たるべきである。

「苦しいとはどういうことなのか」「言語とは何なのか」「語るとは、人間のどこにどのように作用するのか」の解明が援助職者のうちに囁目されているのではないだろうか。ここでは「聴くことの本質的援助性」について言及する。また、援助職者用の手引き書には、「適切な問いかけ」の必要性が謳われているが、実際、何を、どのように問いかけたらいいのか、その詳解は示されていない。そこで、「苦しみと緩和の構造」モデルによって、苦しみを構造的に明確化していくような問いかけができれば、苦しみのなかにある人自身が自己の苦しみを構造化しながら自照することができ、それが苦しみからの解放の第1歩になる。

どうにもならないことのなかで苦しんでいる人は、どうにもならなさに新しい意味を与え自分のなかに納めていく。どうにもならなさを自己の中に納めるときのプロセスを俯瞰すると、「語り」の役割が大きくクローズアップされてくる。仮に私たちが言語をもたなかったら、苦しむこともなかったのかも知れない。苦しみとは思考であり、思考は言語だからである。しかし、言語は苦悩からの解放の手立てでもある。

本ワークショップで苦しみを構造的に理解できるパラダイムを手に入れてほしい。